
朝と夜の物語

離宮 愛琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朝と夜の物語

【Nコード】

N6457N

【作者名】

離宮 愛琉

【あらすじ】

誰かが生まれる事で
誰かが死んでゆく事で
物語は生まれる。

では、生まれずに死んでいった者には
物語はあったのだろうか…？

【朝と夜の物語】

誰かが生まれる事で
誰かが死んでゆく事で
物語は生まれる。

では、生まれずに死んでいった者には
物語はあったのだろうか…？

【朝と夜の物語】

フランスには昔から

生まれずに死んでいった子が一人で寂しくないように
その子の棺には双子の人形を入れる風習がある。

その人形にはそれぞれ意味があつて

右手に死んで行く夜の意味合いを持つ 菫 紫 の人形を

左手に生まれてくる朝の意味合いを持つ 紫陽花 青 の人形を

世界を見ることがなく死んでいった子に

物語を見せてくれるように、と願いを込めて。

永遠の冬に、春が来る事を祈って。

「A u r e v o i r , h i v e r …」

死に行くその子に、「冬」と名付けて…。

『S a l u t , e n c h a n t e e !』

暗闇に双つの声が響く。

起き抜けでぼんやりとしていた彼は、当たり前のように目の前にいた二人に驚いた様子で尋ねる。

「へ……？き、君達は……？」

そう問われた二人は一度、顔を見合わせて嬉しそうに笑ってから

「私はヴィオレットです、ムツシユー。」

彼の右手側にいた紫の服を着た少女が言い、

「私はオルタンスです、ムツシユー。」

彼の左手側にいた青の服を着た少女が言った。

にこにこ彼を見ている二人は、瞳の色こそ違うものの、ほとんど同じ顔をしていた。

「君達は……双子？」

呆けたように言う彼に、また二人は嬉しそうに答える。

『Oui, monsieur!!』

「そうなんだ……え？僕がmonsieur ご主人様？」

そう訊かれたヴィオレットとオルタンスは、その問いには答えず、それぞれ彼の腕に抱きついた。

「え、……ええっ!？」

驚いている彼に構わず、二人は話しだす。

「ムツシユー？オル達はムツシユーが寂しくないようにここにいるのよ？」

「ムツシユーのして欲しい事、何でも言って？」

「きつと、叶えてあげるからね？」

「え、ああ……うん……」

若干、ペースに吞まれながらも、どうしても訊かなければならない事が彼にはあった。

「えーつと……じゃあ、一つ質問に答えてくれるかい？」

『Oui, monsieur!!』

あまりに元気のいい返事に対し呆気にとられながらも、なんとか思考を働かせ、問うべき質問を導いた。

「…じゃあ、…僕は誰なんだい？」

その静かな問いに、双子の人形は声を合わせて答える。

『…ムツシユー、イヴェール…』

「イヴェール」

その名前が意味するものは、永遠の冬。

いつからか、生まれずに死んだ者をそう名付ける風習があった。
だからこそ、目の前にいる二人の存在の意味も

彼は容易に知る事ができたし、自分の存在も信じる事ができた。

「…それで、僕は何も知らないんだね…」

悲痛にも似た呟きが木霊する。

「で、でもね、ムツシユー、知らない事は知ることができるのよ？」

「そうそう！だから私達、こうして生まれたのよっ！」

そう言うヴィオレットとオルタンスは、落胆しているイヴェールに
少し焦りながらも一生懸命に励まそうとしている様子だった。

「そっか…そうだね、うん。…ありがとう。」

そう言つて少し笑つて見せたイヴェールを見て、二人は一度きよと
んとし、それから二人して辺りを跳ねまわりながら声を上げた。

「ムツシユーが笑ったよ、ヴィオ！」

「ムツシユーが笑ったね、オル！」

「え、あのー…」

「ムツシユーがありがとうだって！」

「ムツシユーがありがとうだって！」

「えっと…ヴィオレットとオルタンスだっけ…？ちょ、ちよつと落
ち着いて…」

『ムツシユー！』

「…！？は、はい！？」

突然呼びかけられて驚いていたイヴェールに、満面の笑みで二人が言う。

『此処にRomanはあるのかしら?』

「……は?」

そうしてしばらくして、僕は二人と打ち解けてそれなりに楽しく過ごしていたんだけど…。

でも、やっぱり僕は知りたいと思った。

僕が此処に存在している意味を。

僕が見るはずだった世界を。

外はずっと冬のままだけど、ここにも僕の物語があると二人が教えてくれたから…。

「ヴィオ、オル?ちょっとお願いがあるんだ。」

そう言う「何?」と言いながら二人が傍に来る。

そんな二人の頭を軽く撫で、僕よりだいぶ小さな二人に視線を合わせる。

「この世界には僕が生まれて来るに至る物語があつたのか…見てきて欲しいんだ。そして、教えて欲しい。其処にどんな物語があつたのかを。」

二人の手を取り、自分の頬に当てる。

「ヴィオレットには、夜の物語を、オルタンスには朝の物語を探して欲しい。君達が物語を探しやすいように、ヴィオには死が訪れるのを、オルには生が廻つて来るのが分かる力を渡すから。」

行ってくれるかい?…と、訊く前に二人が口を開いた。

『Oui, monsieur…』

途端、光と共に二人の頬に模様が浮き出る。

オルタンスの左の頬に太陽の風車が
ヴィオレットの右の頬に月の揺り籠が

時は廻り、歴史は築かれる。

何度も、何度も、朝と夜を繰り返して――

「さあ、行つておいで……」

『O u i , m o n s i e r ……』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6457n/>

朝と夜の物語

2010年10月9日10時46分発行